
○ × **4** ! !

kurokuma

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

○×4!!

【Nコード】

N4023P

【作者名】

kurokuma

【あらすじ】

一流シェフを父に持つ木我 竜輝は親友にさえ隠していることがある。

父のこと、そして、料理好きであること。

彼の作ったお弁当のおかずを、校内メガネ美少女No.1のクラスのヒロインを譲ってしまったことから、

彼の高校生活二年目はドタバタすることになる。

であった、きっかけ!! (前書き)

よろしくお願いします。

閲覧してくださいとうれしいです。

であつた、きつかけ！！

ピロリロリン

愉快的効果音は、普通なら些細な喜びになるはずなのだが、ここま
で来るとぜんぜんうれしくない。

自販機を前に少年は大きなため息をついた。

ピロリロリン、おめでとうございます。 もう一本えらんでね
「何本当たるんだ・・・」

先ほどから当たりつき自販機が永遠に当たっている。 実際に言うと、
ただいま十本目に突入しようとしていた。

一種のバグかなにか？ 自販機の前で何回もボタンを押している。
そんなオレを、学校帰りの人などの周りの人たちは珍しげに見
ている。

そういうのはすごく恥ずかしいのだが、こんなチャンスを逃すのは
もったいない気がする。

かといって、たかがジューズ数本のために友達を呼ぶなんてめんど
うくさい。

バグッた自販機を前に格闘をしていると、自販機にかかる影が三人
になった。 嫌な予感しかしない。

『きみ、面白いことしているね、ちょっとお話を聞かせてくれない
かな？』

ここまで連続であたりを引いたら、さすがに何かしたと思われるも
仕方がないよな。 今思うと、自販機がなんだか熱かった気がする。

自販機との格闘をあきらめて、警官さん達と交番で数本のジューズ
を前に、三者面談になりました。

『きみは自販機に何かしたんじゃないのかい？』

「なんにもしていません」

『じゃあ、業者さんから連絡が来るまで待っていてもらおうか』

勘弁して欲しい。夕方から大好きなアイドルの出ている料理番組が始まるのだ。

こんなところで時間なんかつぶしている場合じゃない、業者さん、早くきてくれ。

『先輩、彼の無実を証明するって言っている女の子が来ていますが・・・』

『ん？ まさかグルか？』
まさか、そんなはずはない。

そもそもそんなことする気なんてない。 まさしく無実だ。勘弁してくれ。

『どうしますか？』 『わかった、通せ』 『はい』
それにしてもいつたい誰なのだろう？

『つれてきました』 『ごくろう』
確かあの子は・・・

『知り合いか？』 「いえ、」 『おなじ学校の藤崎といいます』
そう、二年になってから同じクラスになった人だ。

身長は女子にしては少し低めで、黒い長髪は結んでいなく、赤いメガネが特徴的だ。

いい忘れていたが、オレは木我 竜輝^{りゅうき}

天性の機械オンチということで通っている。 去年なんかは学校のパソコンを壊してしまった。

友達に絶対にオレに機械類を貸してくれない。 悲しいことだ。 全部偶然なのだが・・・

『わたし、近くで見えていましたけど、彼は普通に買っていましたよ？』

平然と言う少女をみて、警官達は顔を見合わせている。

『ん、わかった、今回は見逃すから次から気をつけろよ？』
一体なにをどうやって気をつければいいのか？

「迷惑おかけしました」

実際かけられたのはこちらなのだが、そんなこといったら余計にこじれる気がするから止めておく。

二人で交番を出てからしばらくして、

「ありがとう。助かったよ、確か同じクラスだよな？」

そういつて、ただで手に入れた。ジュースを渡す。彼女はプルタブを開けながら、

『そうでしたっけ？　ただ無実の人が警官に捕まるのは見ていて虫唾が走るのぞ』

見かけによらず怖いことをいう。

これがクラスで一番かわいいヒロインの本性なのだろうか？　だとすると、思いを寄せている男子たちはかわいそうだ。

もちろんオレは違うが、

「そ、そうか・・・、また明日お礼するからさ、とりあえず今日はありがとう！！」

ああ、こんなところで時間をつぶしている場合じゃない。料理番組でお料理アイドルの琴ちゃんと一緒に勉強しなくては！！

立ち尽くすヒロインをよそに、オレはジュースを抱えて、全速力で家へと帰った。

みんなと一緒に、レッツ、クッキングうー

オレはテレビの前に思わず正座してしまった。先ほどのジュースはお茶をすすするようにして飲む。

少し小柄でその目はきらきらしているように見える。一度でいいから直接会ってみたい。

できることなら握手したい。恥ずかしながら、オレは琴ちゃんの大ファンで料理をするのが好きだ。

料理が好きなことに関しては、恥ずかしいから親友にも話していない。知っているのは母親ぐらいだろうか？

それとは別の料理が好きになったきっかけの父は、単身出張をして

いて、母とオレで二人暮しだ。

父は忙しく、息子が大きくなったせいかな、なかなか連絡を取り合うことはない。それでもうちの家庭はうまくやっている気がする。

『今日はなにを作るの?』

最近はおれが料理の練習がしたいからということ、料理はおれが作っているということになっている。

「あー、からあげでいいかな? 鶏肉あるから」

母は親指をこちらに向けて、にこやかにしている。たまには料理させたほうがいいかな?

朝、

『起きなさい』なんて声をかけられるわけではない。なぜならおれが弁当を作っているのだから。むしろそのセリフはおれだ。

「おきろー、朝だぞ!」

眠たそうにしているのは、まだ三十過ぎぐらいの母だ。たまにはおれもゆっくり寝ていたい。

『あー、おはよう、りゅうき』

なんでこんなにのんきなんだろう? まあ、たしかにまだ時間があるから問題ない。

「おれはあんまり時間ないから、そろそろいくわ」 『いつていらつしい』

こうして、新学期から数日たったの学校生活がまた始まる。学校の帰りに当たりつき自販機に近づくのは止めようと誓った。

お昼の、お弁当！！

『おはよう！ 竜輝』 「おう、おはよう」

こいつは桜木 拓人

身長は平均より高く、髪型はオールバック、ルックスもよく、クラスでは結構な人気者だ。おそらくクラスの全員と話せる気がする。

まあ、要するに社交性があるといったところだ。 先ほどのように隠し事は結構あるが、親友だと思っている。

二人で話しながら五分前ぐらいにクラスに入る。

ほとんど登校しているクラスのなかをざっと見渡す。 後ろのほうの席にいるはずの恩人がいない。

「また藤崎はいないのか？」 『なんだろうな、また家の用事かなんかじゃないか？』 「ふーん」

藤崎はいつも送れて学校にやってくる。 場合によっては学校に来ない。

学校側は理由を知っているらしいが、オレらが知ることはできないらしい。

『まさか、藤崎に気があるのか？』

もしもそうだったとしても、彼女は学校で一番きれいかもしれないということだ、

人気があり、ライバルはあまりにも多すぎる。 オレはそんな無茶な恋愛はあまりしたくない。

第一、オレには好きな人がいる。 クラスの奴らに挨拶を返して、鐘の音と同時に席に着いた。

そうして、

一時限、二時限、三時限と彼女が来ることはなかった。 下手したら、

今日は会うことができないのではないだろうか？

四時限目、数学

まるで呪文を書いているかのように、黒板にチョークが走る。

どうしてここまでうるさくできるのか、となりは大きなイビキをしている。

どうしても眠いのなら仕方がないが、第一にノートを出していない、授業放棄と捕らえられても仕方がない気がする。

『桜木さん』

ここまでイビキという名の授業妨害をしているのだから、先生の必殺技が出されても仕方がない。

『はあ〜い』

眠そうにしている彼が起き上がると、シュツツという鋭い音が聞こえると同時に、チョークが彼の額に当たった。

『いだっ！！』

あたりでクスクスと笑っている人もいたが、同じ目に遭わないようにと静かになった。

キンコーンカーンコーン

四時限目が終わり、購買に行くものはクラスを出ていき、お弁当を持ってきた者は机や椅子をガラガラと動かしている。

購買に行くものたちと同時に、藤崎がクラスに入ってきた。

理由は知らないが、ずいぶん遅刻だ。入り口できよろきよろして、オレを見つけるとこちらに来了。

クラスに居る人達全員が、そしてたまたまクラスの前を通りかかった生徒でさえ、こちらを見ている。

拓人はどうだか知らないが、男子諸君の視線が痛い。

そんなことはどうでもいいとして、なんの用があるのだろうか？

恩人なので、何か頼んでくれれば可能な限り答えるつもりだが、手を差し出して一言、

『木我、お弁当ちょうだい』

いや、まで、可能な限りそうしてやりたいが、オレの空腹はどうなるのだろうか？　そして昨日であった時とは口調がぜんぜん違う。

「それはないだろ」

それを聞いていた男子諸君はお弁当のおかずを分けてあげると騒いでいる。

『みんなごめんね？』

滅相もない、そんな風な顔をしている男子諸君は弁当からおかずを出していく。

『あなたも頂戴』

苦労して作ったおかず（昨日の残りも含め）をあげるなんて、わが子をとられる感じた。周りの視線がつらいので、得意なおかずの玉子焼きをしぶしぶ差し出した。

そうして、オレの弁当のふたを持った藤崎は、女子の集団に行ってしまった。周りの視線がやりづらいので、残り物をいただきに拓人と購買に向かう。

『なあ、藤崎となんかあったのか？』　「いや、話すと長くなるんだが・・・」

『ふーん、』　「聞いてきたくせに反応薄いな」

『いや、なんでそこに藤崎が居たんだろうな？』　「あー、たしかに・・・」

たしか藤崎は同じ路線だが、一つ前のはずだから駅前に居るわけがない。

俺の住んでいるほうは、テレビ局やショッピングモールがある感じだ。　おそらくショッピングモールにでも行っていたのだろう。

「オバちゃん、なんか残っている？」

けだるそうに答えられる。

『アンパンだけだよ』

さすがに人気がないのだろうか？　百円で二つ買った。

アンパンをかじりながら、教室に戻るとなんだか騒いでいる。いっ

たいにながったのだろうか？

『木我君、このおかずは君が作ったの？』

オレの気になっている女子、相沢 沙織さおり

女子でありながらも、クラスを盛り上げる重要人物だと、オレは思っている。

オレの中でだが、彼女の存在はでかい。 たしかにオレのおかずだったが、この騒ぎ具合はなんだろうか、

そして男子諸君の視線はなんだろうか？ どうして相沢さんが話しかけてくれたんだろう？

『どうなの？』

ここで自分の趣味を打ち明けるのは気が引ける。

相沢さんにへんな風に思われたくない。 いまどきはこういう趣味ってどう思われているのだろうか？

「ああ、これはうちの母さんが」

『へー、いいなあ、木我君のお母さんすごいね、私も分けてもらったんだけど、こんなにおいしい玉子焼き初めて食べたかも』

そこまでほめられるとなんだか照れくさい。 隣にいた拓人が口を

挟む。

『なんでおまえが照れているんだ？』

「い、いや、てれてねーよ」 『変な奴だな』

おまえにだけには言われたくないぞ、拓人。

クラスの女子から、どんな母さんなのか聞かれたが、

期待されているような母ではないので、なんとも答えづらかった。

そうして学校が終わった。

調理室の前の階段を通り、下駄箱でみんなに挨拶しながら学校をあとにした。

うしろの、謎の視線！！

拓人と同じ駅なので、電車を降りたあとも、途中まで一緒に帰っていた。

『竜輝・・・』 「なんだよ」

『オレ、ちよつと用事思い出したわ、先帰る』 「あつ、おい」

なにかあるのならばかまわないが、

先ほどから視線を感じるの、なんだか一人で居るのは怖い。 なんでこんなところでストーカーに遭わなくてはいけないのか？

振り返ると、店の看板や電柱に次々に隠れていく人影が見える。

というより、丸見えだ。 そして、どこかでみたことのある人影だ。

『おいっ』 「なに？」

そこで返事をしてはストーカー失格だろ。

『おまえ、実はバカだろ？』 「は？」

バカだ。

『何しにきたんだ？』 「あんたの母さんに会いに来たのよ」 「

なんで？」

今日のおかずのことだろうか？ それならオレに頼めばいいんだ。

まあ、それを知られたらまずいのだが。

『ただいまー』 「お邪魔します」

なんだかんだで、彼女をまくことができずに、家に来てしまった。

『母さんは遅いけど、それでも待つのかよ？』

『さつきも言ったでしょ、待つって、それともなに？ 自分が変な

ことをしそつで怖いのかしら？』

『おれはどこの変態だ！！ そうか、だつたら勝手に待てよ』 「

ええ」

なんて口が悪いのだろう？ 学校ではそんな姿をまったく見せないのに。 とりえず、時間が時間なので晩御飯の準備を始めた。

『なんであんたが料理しているのよ』 「いつも帰りが遅いから、

それなりに料理できるようになっているんだよ」

それなりに、って言うのはウソだけだな。

『ただいまー』

リビングに入ってくるなり母は驚いている。

『え？ 竜輝？ 彼女ができたの？』

まあ、キッチンで料理している隣に女の子がいたら、こんなことを言ってもおかしくはない。

しかし、こんなに口が悪くてストーカーをするのはこちらから狙い下げだ。

『まったくもって、違います』

気がなくても、そこまでキツパリと否定されるとかなりつらい。

『よくわからないけど、せっかくだし、みんなでご飯食べましょう』
なんでここまでのんきなのだろうか？ 息子であるオレすら怖い。

顔に似合わず、ご飯にがついている。性格といい、もう少し女の子らしくして欲しい。

『いっぱい食べるねー』

ほんとにこの人はのんきだ。食事も終わり、お茶を用意していたのだが、なんだか話が弾んでいる。

女性同士、気が合うのかもしれない。男は黙って食器でも洗つていようと思う。

『師匠、私に料理を教えてほしいのです』 『いかがして料理を学ぼうと？』

なんてノリノリなんだ。大体、母さんは料理なんかぜんぜんできないだろう？ 言葉に責任持つてください。

『竜輝』

あー、なんか嫌な予感がする。

「なんだよ、かあさん」 『竜輝師匠お願いします』

やっぱりそうきたか、ほっぽり投げやがった。

彼女は驚いた顔でキッチンにいるオレを見ている。それも無理はない。だって、さんざん嘘ついてきたからな。

『ど、どういうこと?』

面倒だけど、説明するしかない。

「オレが料理好きだってこと、知られなくなかったんだよ」 『ど
うりで、女々しいと思っ たわ』

なんでそうなる。

「うるさいな、そんなこと言うなら教えないぞ」 『この際、あん
たでいいわね』

会話になってない。

「じゃあ、聞きたいことがあるんだけど」 『ハンバーグの作り方
教えなさい』

話を聞け、それ以前におまえはハンバーグすら作れないのか?

「いや、だから、どうして料理をするんだ?」 『いいから、教え
なさい』

きりが無い。

「わかったよ、いつまでに教えればいいんだ?」 『あさってまで
さすがに早すぎる。こんな時間だし、明日は学校、何より材料がな
い。』

「それはムリだろ」 『いいからはやく』
強情すぎだ、絶対こんな奴とは付き合いたくない。

もし付き合ったら、高級ブランドを無理やり買わされそうだ。それ
以前にそんな金はどこにもないが。

「あー、わかったよ、じゃあ、明日の朝までに材料用意しとけ」

『なにを用意すればいいのよ』

わからねーのかよ。心の中でうんざりしながらメモに材料を書き記
した。

「ほら、遅いからさっさと帰れ」 『わかってるわよ』

最後の最後まで怒鳴りあつて別れた。 こんな時間だ、送っていつ
たほうがよかったかもしれぬ。

「まったく、なんなんだ、アイツは・・・」 『いいじゃない、あ
んなかわいい子と口喧嘩できるなんてー』

相変わらずこの人はのんきだ。

なんだか、明日は忙しくなる気がする。
じしておくの、忘れてた!!」

「やべー、アイツに口封

オレの、好きな人！！

そうして金曜日、

相変わらず藤崎はなんだかの事情で、午前中の学校には居ない。

料理をする理由がわかれば、なんとなく事情がわかるかもしれないのだが。

休み時間、少し遠くの席の藤崎が話しかけてきた。

『竜輝おまえ、気が変わったか？』 「まさか！！」

『ほんとうか？ 相沢がいながら、ほかの女子の席を見ていたら、なんだかそんな感じがするぜ？』 「そうだな、気をつける」

オレはアイドルの琴ちゃんが好きだが、それは手の届かない領域だからこそだ。

現実を見るとすると、相沢 沙織が好みだ。 活発的で、面白くて、

何より笑っている姿がかわいい。

昨日の関わりから、さらに話したいという願望が強くなっている気がする。

だから、ほかの人に気がいくなんてない。 ましてや、あんな口の

悪い女はこつちから狙い下げだ。

『昨日の流れを利用して、相沢と一緒に飯でも食ったら？』

「いや、いきなり二人で？」 『おまえは何言っているんだ？ そんなことできたら誰も苦労しないだろ。』

オレもついていくから、一緒に誘ってみるんだよ』 「わ、わかった」

高校二年になるまで、ともに恋愛に向き合わなかったオレは、今では苦労する側の人間だ。

そういうことにはぜんぜん頭が回らない。 数学の授業が始まると、

相変わらずチョークが飛ぶ。

いい加減学習しろよって思うのは、俺だけじゃない気がする。 オレはうなだれている拓人に近づき、声をかけた。

「どうするんだ？」 『まかせた』

提案した人がこれでは、この先が不安だ。 正直裏切られた気分だ。
自分で何とかするしかない。

『木我君、よかつたら一緒にお弁当とらない？』

女神が降りてきた。最近草食系が多いが、それも仕方がない気がする。

「ああ、いいよ、桜木も誘っていいか？」 『うん、もちろん、いっぱいいたほうが、いいからね』

そんな、彼女の優しい言葉はすごくうれしい。

しかし相沢さんの後ろからの肉食の視線が草食をビビらせる。藤崎だ。奴がオレの幸せなひとときを奪いやがった。

「おい、拓人！！」 『あー、わかってるって』

そうして四人でお弁当をいただくことにした。四人の中で一人だけ弁当が違う、相沢さんのお弁当がかわいらしいのに対して、

おまえの弁当はなんだ！ プライベートの保護すらないスーパーのお弁当ではないか！ しかも、お肉ばかりのカルビ弁当。

クラスのヒロインの自覚があるのなら、サンドイッチなどのバランスがよくてかわいいものを食べて欲しいものだ。

こちらからすると、バランスが悪くて見てられない。

「これやるよ、」

プライベート保護のない透明なふたに、おかずとトマトをおいた。

『ちよつと、いらないわよ』 『木我君、玉子焼き ちようだい？』

「ああ、いいよ」

オレは相沢に弁当を差し出した。彼女が玉子焼きを取り出すのと同時にトマトが投げ込まれる。

「おまえな、バランスよくとらないとダメだろうが」

『なんであなたが心配するの？』 『おいおい、竜輝、おまえは親かよ』 「あつ、」

相沢さんまで笑っている。なんだか照れくさい。 相沢のほうを見ている俺に、藤崎は耳打ちしてきた。

『あんだ、あんまり調子に乗っていると、秘密ばらすよ』

「なっ、」 『ん？ どうしたの？』

相沢が心配してくれたのだが、それと同時に俺の足を踏んできた。

「っ！！」 『？』

オレと藤崎を除いた二人は、不思議そうな顔をしている。 犯人の藤崎はわざとらしく首をかしげている。 それと同時に足を踏む力が強くなる。

「い、いや、小指ぶつけた」 『そうじゃなくて、なにを話していたの？』

ここは足が使い物にならなくなる前に、ウソでごまかすしかない。

「藤崎が昨日のお礼を言っていたんだよ、美味しかったって」 『

もー、ことみは恥しがりやなんだから』

恥ずかしそうにしているが絶対に演技だ。 こいつはかなりの女優になりそうだ。 そうでなくては、さっきの俺が受けた痛みはいつたいたんなのか。

『あのさあ、夏休みなんだけど、このメンバーでどこか出かけない？』

藤崎がいるのは気が引けるが、相沢さんがいるなら絶対にいく。

オレは拓人と顔をあわせてうなずいた。

「ああ、いいね、それ」 『オレも賛成だ』 『ことみはどう？』

一応確認しておくが、先ほどから「ことみ」と呼ばれているのは藤崎のことだ。 こんな腹黒な奴とアイドルのことちゃんが同じな名前だなんてなんだか、許せない。

『うーん、ちよつとまだ、予定がわからないから』 『大丈夫だ

よ、ことみの予定にあわせるから、ね？』

相沢さんはオレらをそっちのけで決めてしまった。 そんな風に言われたら、うなずくしかない気がする。

そうして昼休みが終わり。 午後の授業が終わった。 六時限目はオレの大好きな家庭科だった。

クラスに戻る際に、藤崎が何か話していたが、気に掛けても仕方な

いので、拓人と一緒にクラスに戻った。

料理の、レッスン！！

S H R

月曜の用事を言われ、挨拶を済ませると、部活にいくものや帰る人たちはそれぞれがクラスを出て行った。

いつもならオレは帰る人たちの仲間なのだが、拓人は部活に行ってしまった。

そもそもその原因は、この女にある。 かばんを持ってクラスを出ようとした瞬間に腕をつかまれ、

耳元で『これ以上、足を踏まれなくなったら、黙ってついてきなさい』

これで体育館裏に呼び出されて告白ならまだしも、調理室で料理を教えるというのはどういうことだろうか？

この先の展開に何にも期待できない。そもそも、していないが。

『料理を教えなさい』とは言われたものの、学校の調理室でそれをするのではないと思う。

『ハンバーグ作るわよ！！』 「いや、材料がないだろ！！」

すかさず突っ込んだオレをよそに彼女は調理室の冷蔵庫を開けた。

見事に材料がそろっている。

『ほら』

自慢げに言われるのがなんだかむかつく。

「許可はもらっているのか？」 『もちろん、私の手にかかれば簡単よ』

「料理ができてから言え」 『ばか』

バカで悪かったな。

「とりあえず、家の飯も作んなくちゃいけないから、ここで作ったのは、晩飯にもらうぞ」 『ええ、いいわよ』

意外と素直に譲りやがった。日頃からそれならいいのに。

「髪が邪魔になるだろ、」 『それぐらいわかってるわよ』

さすがにそれぐらいはわかっていてくれないとこちらが困る。彼女

は長い髪の毛をポニーテールのように結んで、三角巾をつけた。

「さて、材料は」

ん？ なにこれ？ 神戸牛、紀州清水豚、高級卵「輝」^{かがやき}？

「おい、なんだよ、この高級感のオンパレードは！！」 「なにっ
て材料だけど？」

それはもちろん材料ですけど、こんな高級なものを調理するなんて初めてだ。失敗したらという恐怖がわきあがる。

そもそも、調理室にある安物の調味料なんかで調理していいのだろうか？どちらにしろ、高級品を無駄にしそうで、怖い。

「じゃあまずはたまねぎだな」 「みじん切りね」

まさかとは思うが、みじん切りはできるのだろうか？

「ストーップ、いきなり違う、こうだよ」

出だしからこれでは、かなり心配だ。

「うーん、目が・・・代わって」 「いや、おまえがやらなきゃ意味ないだろ」 「ちよつとメガネもって」

たまねぎにやられそうな目を必死にこすっている。彼女のチャームポイント（？）といえばその赤いメガネだろうか？

「ちよつと、人の顔じつと見てないで、メガネ返して」

「あ、わりい」 「つぎは？」 「次はたまねぎとコショウと卵とあれとこれをいれて・・・」 「こねるのよね」

「ああ、そうだ、あと卵はおまえが入れるよ、オレはその卵に触りたくない」

高級卵を台無しにしたくない。

コンコンッ、パカッ、

お見事だ。そんな悲しい顔でオレを見るな。失敗は成功の元だ。

『どうしよう』

「あー、大丈夫だよ、取り出せば問題ないし、食べるのは自分たちだしな」

オレは彼女がこねている間にフライパンに火をつけた。

『これでどう？』

「ああ、よくできていると思うぜ、

あとは小判みたいな形にして、こんな感じに真ん中をへ込ませて焼けば終わりだ」

最後はこいつに任せたくはないが、こいつが学びたがっているのだから、やらせてやろうと思う。

『できたあ』

この笑顔は素直なものだと思う。これがウソだったら、相当な悪女だと思う。

ぱくつ、

「ん！」 『うん！』 「うまいじゃんかよ」

材料が材料というのもあるが、何よりも彼女ががんばったのだ、美味しいに決まっている。

「じゃあ、あとはうちの母さんに食わせるか」 『うん、もってい

く』 「あ？」

『私が作ったんだから私が持っていくの、そんなことわからないの？ ばか？』

そこまでいう必要あるのだろうか？

大体教えたのはオレだぞ？ まあいいか。家庭科の先生にお礼を言ってから学校をあとにした。

『ちよつと、近いんだけど、離れなさいよ』 「うるせーな、電車が込んでいるんだから仕方ないだろ」

大体こんな時間に電車に乗るのはあんたのせいだ。文句を言われてもどうしようもない。

「で、頼みはこれですんだのか？」 『ん？ いつ終わったっていったの？ 幻聴でも聞こえたの？』

オレはそこまで耳は悪くない。大体こんなのがまだ続くのかよ、勘弁して欲しい。

「ただいま」 『お帰りなさい、遅かったね』

怒っている様子がないのが、母らしいといったところだろうか？

腹がすいているのか少しぐったりしている。

『お邪魔します』 『あら、いらっしやい、料理の修業はできたかしら？』

『はい、だから、今日は昨日のお返しにハンバーグ作ってきました』
ハンバーグは母の好物だ。なんともタイミングがいい。

『そうなのお、うれしいわ、今日も一緒にご飯食べていかない？』

『ありがとうございます』

『それじゃあ、足りないだろうから、もう一品作るよ』 『よろしく』 『お願いね』

おまえは何様だ、そして俺の立場は？ オレ、執事にでもなれるかな？

それ以前にシェフになりたいオレの夢は適うのだろうか？ できることなら、料理関係に進学したいと思っている。

『ねえ、まだ？』 『あー、今できるよ、少しぐらい我慢しろよ』

『レディを待たせちゃダメよー』

あんたはお腹が空いているだけだろう？ こうして今日も食卓は三人になった。 いつもより母さんがうれしそうにしているのは正直にうれしい。

『今日はありがとう』 『ああ、』 『どうして料理ができること隠しているの？ 別に恥ずかしがることじゃないじゃないの？』

『母さんが料理できないのを遠まわしに言っているようなもんだろ？』 『ふゝん、あなたもしかしてマザコン？』

『ふざけんな、マザコンじゃない、だいたいおまえの親が見てみてーよ』 『そうね、じゃあそろそろ帰るから』 『あ、おう』

何かまずいことを言った気がする、彼女の家庭のことなんてまったく知らない。 そういう話はあまりしないほうがいいかもしれない。しばらく、彼女を見ていたのだが、ケータイ越しに電話をしている。迎えても呼んでいるのだろうか？ 大丈夫そうなので家に戻った。『ねゝ、竜輝ゝ、次のことちゃんのお料理教室は何かしら？』 『ん？ 母さんの好きなハンバーグだよ』

『そうなの！？　じゃあ、またハンバーグ作って、ことみちゃんと一緒に』

ハンバーグなんていつでも作ってあげるが、あいつと一緒に作るのは気がひける。

そもそも、あんな高級食材を使ったあとの、普通のハンバーグなんて劣ってしまっただろう。

『それにしても今日のハンバーグは高級だったね、お父さんとの外食を思い出すわ』

最近気がついたのだが、この人は食べたものの食材を当てるのが得意なのかもしれない。

料理学校に通っていただけはある。今は食べ物に関係のない銀行員さん。オレが料理をできる理由は父がシェフだからだ。

子供のころから料理を教えてもらっていて、それのおかげで料理が好きなのだ。

今ではその腕を買われ、海外のレストランで活躍していると聞く。

オレもそんな風になりたいと常日頃から思っている。母さんと父さんが出会ったのは料理学校だ。

母さんはまったく料理ができなくて、要するにオチこぼれだったというわけだ。対して、父さんはエリート中のエリートで数々の賞を取っていたというわけだ。

そんな料理が苦手な母さんが、父さんに料理を教えて欲しいといったのが始まりだ。それから二人は気が合い、お互いに惹かれていったらしい。

小さいころに父さんから聞いた話だが、オレもそんな恋愛がしてみたい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4023p/>

○ × 4 ! !

2010年12月14日22時37分発行